

第1章

<概要>

科学的な戦争研究を理解するために必要な考え方と方法を解説する。

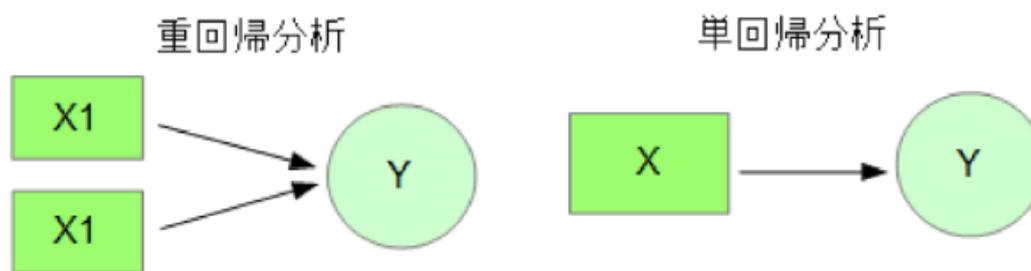
<内容>

1：ユニークな戦争はありえない（p25）

- ・序章における戦争の定義（①当事者同士が一致できない問題が存在し、しかも②その対立を解決する交渉に失敗して組織的、継続的に暴力に訴える）から、世界大戦と地域戦争の間に本質的な差はなく、同列のものとして比較可能。
- ・戦争と平和を研究する際の母集団は、多くの場合、調べつくすことが困難ほど巨大である。→（そのため） 観察者（研究者）が戦争の定義とコーディング・ルールに基づいて歴史資料から戦争を特定するが、その際、特定されるのはあくまでもサンプルであって、母集団ではない。
- ・サンプルから母集団の真の値（＝不明なもの）を統計学の考え方をを用いて、推定する。

2：分析に用いられるツールの紹介（p29）

- ・国と国のペアをダイアットと呼び、主にある国がある年に戦争するかどうかは、ダイアット・年という分析単位で表現する。
- ・科学的な戦争研究では、戦争の発生を結果変数に置き、結果変数を説明する複数の説明変数をおく重回帰分析という枠組みを用いる。（単回帰分析でなく、重回帰分析を用いるのは、「デーヴィッド・シンガーの第一法則」による。）



- ・政治学の分野においても（自然科学的な）実験が導入されており、因果関係の存在を示す際には、先に挙げた回帰分析よりも実験のほうが、研究者が介入することができるので、効果的な手法である。

3：戦争には常にコストがかかる（p.35）

- ・合理的戦争原因論において、「戦争には常にコストがかかり、交渉よりも非生産的な問題解決手段」であることが重要な仮定。このコストには、物理的なコストと、社会的なコストの二つが存在する。
- ・戦争はコストがかかる問題解決手段であることをという一般化は、ごく少数の人間、集団を除けば可能である。